主日礼拝説教「あなたの神は、わたしの神」予稿

日本基督教団石神井教会　2026年11月15日

【旧約聖書日課】出エジプト記　3章1～15節

1モーセは、しゅうとでありミディアンの祭司であるエトロの羊の群れを飼っていたが、あるとき、その群れを荒れ野の奥へ追って行き、神の山ホレブに来た。2そのとき、柴の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れた。彼が見ると、見よ、柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない。3モーセは言った。「道をそれて、この不思議な光景を見届けよう。どうしてあの柴は燃え尽きないのだろう。」

4主は、モーセが道をそれて見に来るのを御覧になった。神は柴の間から声をかけられ、「モーセよ、モーセよ」と言われた。彼が、「はい」と答えると、5神が言われた。「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。」6神は続けて言われた。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った。

7主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。8それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の住む所へ彼らを導き上る。9見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。10今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」

11モーセは神に言った。「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」12神は言われた。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える。」13モーセは神に尋ねた。「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがいありません。彼らに何と答えるべきでしょうか。」

14神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」15神は、更に続けてモーセに命じられた。

「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。

これこそ、とこしえにわたしの名

これこそ、世々にわたしの呼び名。

【福音書日課】ルカによる福音書　20章27～40節

27さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた。28「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。29ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子がないまま死にました。30次男、31三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さないで死にました。32最後にその女も死にました。33すると復活の時、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」34イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、35次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。36この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。37死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。38神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」39そこで、律法学者の中には、「先生、立派なお答えです」と言う者もいた。40彼らは、もはや何もあえて尋ねようとはしなかった。

モーセの寄り道【こども説教のために】

『聖書』の最初に収められている五つの文書は、「モーセ五書」と呼ばれることがあります。昔の人は、これらの文書をモーセが語って記させたと伝えてきたのです。その中には、モーセがシナイ山で主なる神から授けられた教えの御言葉（律法）が記されています。『聖書』は、その御言葉が元になっているのです。ですから、主イエスをはじめとするユダヤの人々は、神の教えを「モーセはこう書いている」と言って説明しました。

そのモーセが神とはじめてお会いしたのは、80 歳になってからでした。モーセは、生まれてすぐにエジプトのファラオの王女の家で育てられることになったので、エジプトの神々のことは知っていたでしょう。40 歳のときにファラオの家を離れてミディアン人の祭司の家に身を寄せるようになりましたから、ミディアンの人の神のことも聞いていたでしょう。けれども、神とお会いしたことはなかったのです。ところが、羊の群れを連れて荒れ野を進んでいたときに、山の中で柴が燃えているのに気づいて、寄り道をしました。いつまでも燃えている柴がどうなるのか、見届けようと思ったのです。すると、そこで「**モーセよ、モーセよ**」と呼びかける声がしたのです。主なる神の御声でした。モーセは、「**はい**」と答えて、その言葉に耳を傾けました。それが、モーセがはじめて神とお会いしたときのことでした。

神は、わたしたちが行く道を急がずに寄り道して御声に気づくことができるようにと、お導きなのかもしれません。

道を逸れて見届けよう

日曜日の朝、皆さんをお迎えする会堂の玄関扉は、いつも開けっ放しにするようにしています。礼拝堂の入り口扉も、同様です。10 年前、わたしどもが着任した頃、玄関扉は、日曜日の朝であっても閉じているのが普通でした。礼拝堂の入り口扉も、礼拝が始まると閉じられているのが普通でした。鍵は掛かっていなくても、自分で扉を開けなければ、会堂の中に入ることも、礼拝堂に入ることも、できませんでした。そこで、役員会で相談して、日曜日は玄関扉も礼拝堂入り口扉も常時開放しておくことにしていただきました。道行く人がどなたでも中の様子を覗うことができ、気軽に入ってきていただけるようにしたいと考えたのです。

最近は、多くの教会が日曜日の礼拝をインターネットで公開していますから、初めて来会する前にあらかじめ営みの様子を確認して来られる方が少なくありません。教会を探しておいでくださる方のために、できるだけきめ細かな情報を公開することは、今の時代には必須です。いつも最新の情報に更新し、また、教会が知ってもらいたい情報だけでなく、ご覧くださる方が知りたい情報を提供できるように見直していくことも必要でしょう。

けれども、教会が日曜日の会堂の扉を開け放っているのは、本当のところ、そういう方のためではありません。あらかじめ教会を探して調べ、おいでくださる方ならば、たとえ扉が閉じられていても、それをご自分の手で押し開けて、中に入ってきてくださるでしょう。そうではなく、扉の開け放たれた教会がお待ちしているのは、ただの通りすがりの人、ここに教会があることは知っていても中で営まれていることをインターネットで検索してみようとまでは思わないでいらした人、なのです。「扉が開いていて、中で何かしているようだから、ちょっと覗いてみようか」と、軽い気持ちで立ち寄ってくださる方を、お待ちしているのです。

モーセは、主の御使いがそこにいることが分かっていて、燃え尽きない柴を見にやって来たわけではありませんでした。そこに行けば主とお会いできる、などと少しも考えずに、ただ興味本位で、足を踏み入れました。ただ、そこで起こっていることが、自分の想像を超えた「**不思議な光景**」だと思ったので、モーセは、敢えて道を逸れて、そこに立ち寄ってみたのです。

日曜日の教会を、道行く人に「**不思議な光景**」としてご覧いただきたいのです。ここで、「柴が燃え尽きないで燃え続けている」のを見つけていただきたいのです。見届けていただきたいのです。

夜の会堂は、正面の照明がともされ、屋根の上の十字架塔もライトアップされています。消えることなく灯り続けています。それは、少し「燃え尽きない柴の燃え続ける炎」に似ているでしょうか。

ここは聖なる場所

けれども、教会の「燃え尽きない柴」とは、本当は、皆さんのことに他ならないでしょう。神の御前に礼拝をささげる皆さんの姿こそ、「**不思議な光景**」です。皆さんは、立派な大木ではないかもしれません。樹種も確かめられないような「柴」に過ぎないかもしれません。わたしたちは、寄せ集められた「柴」のようなものなのでしょう。それでも、ただの柴なのに、燃え尽きない柴なのです。そして、ここで燃え上がる**炎の中に**は、**主の御使い**がおいでくださっているのです。

もちろん、教会が会堂の扉を開け放っておき、わたしたちがどれほど「燃え尽きない柴」として燃え上がっていても、だからと言って、続々と人が押し寄せて来るわけではないでしょう。この教会が目に入るところまで導かれて来なければ、だれもここに足を踏み入れることにはならないのです。

モーセを燃え尽きない柴の燃える山にまで導いたのは、彼が世話をしていた羊たちだったのかもしれません。モーセは、羊の群れを追って荒野の奥へ行き、その山に辿り着いたのです。そこが、「**不思議な光景**」のあるところ、いいえ、「**神の山ホレブ**」だったというのです。「牛に引かれて善行寺参り」ならぬ「羊に引かれて神の山参り」となったのです。

教会は、羊の群れにたとえられます。神の羊の群れ、主イエス・キリストという羊飼いに導かれる群れです。その羊の群れの中の羊であるわたしたちが、ここから送り出されて一週の歩みをする中で、どなたかをモーセのように導いて来る役割を担わせていただくこともあるでしょう。そのときには、わたしたちは自分の役割に徹して、ただ、その人が日曜日の教会という「**不思議な光景**」を見つけられるところまでお導きすればよいのです。そこに足を踏み入れてくだされば、そこには「燃え尽きない柴」が燃えており、主の御使いがいて、主の御声の聞こえるところに留まらせてくださるでしょう。

モーセが導かれて留まったところ、立たされたところは、「聖なる場所」です。主がご自身でお語りくださるところだからです。

わたしたちも、ここで、主がお語りくださる御声を聞くようにされています。導かれて来て、不思議な光景の中に立ち入り、主の御使いに助けられて、御声を聞くようにされています。わたしたちも、後から導かれて来られる人も、同じように、主の御声を聞くのです。

御声をお聞かせくださるこのお方が、わたしの神です。そして、あなたの神です。主イエスが「**すべての人は、神によって生きている**」とおっしゃられたその「神」なのです。ここで、わたしたちは、自分の履物を脱ぎ捨てましょう。このお方の前に立たされて、わたしたちに必要なのは、主イエスがお教えくださったように、互いの足を洗い合い、仕え合うことだけなのです。